介護生産性向上の取組事例

テクノロジー活用による介護現場の業務改善

～情報共有・記録・夜間見守り・移乗介助の見直しについて～

特別養護老人ホーム レモンの樹東海

発表者：施設長　宝地 章浩

施設概要

社会福祉法人檸檬

住所　愛知県東海市名和町南之山10番地の12

特養　110床
ショートステイ　10床
デイサービス　定員30名
居宅介護支援事業所



社会福祉法人 檸檬（れもん）

《法人理念》

会えて良かった。

人は出会いで人となる。

私たちは愛ある人として、感謝と感動のあるところを創ります。
利用者とその家族に安心を提供し、
働く仲間の豊かな人生の追求と、地域の保健、医療、福祉に貢献します。

《行動指針》

愛ある人、5つの宣言。

私は、笑顔で愛ある挨拶をします。
私は、相手の想いを尊重し、その存在を認めます。
私は、向上心を持って、情熱的に行動します。
私は、相手を支えることを自らの喜びとします。
私は、地域社会の一員として、誇りと責任を持って行動します。

社会福祉法人 檸檬（れもん）

1　導入前の課題と導入の目的

導入前の課題　業務負担による職員の疲弊と、離職が多い状況

主な4つの課題

1｜連絡・情報共有

PHSや対面での声掛けが中心。

職員を探す移動が発生し、複数人への同時共有も難しい。

2｜記録業務

ケア終了後に記録を入力。

端末への移動や記録の後回しが、業務負担になり、慢性的な残業が発生。

3｜夜間の見守り

利用者20名を職員1名で見守る場面。

定期巡視の移動負担が大きく、状態把握にも限界。心理的負担も加わり職員が疲弊。

4｜移乗介助

2人介助や抱え上げが必要なケースが多く、職員の腰・肩・腕への負担と安全面が課題。また2人介助になることで、多くの人員が必要。

「職員が安心して働き続けられる職場を目指して」

1　連絡・情報共有

職員間の連絡を円滑にし、
探す･伝える手間を減らす

2　記録業務

音声入力と記録システムで、
入力・転記の負担を軽減

3　夜間の見守り

利用者の状態把握を支援し、
必要なタイミングで対応

4　移乗介助

介護機器を活用し、
抱え上げによる身体的負担を軽減

導入の目的

業務負担を軽減し、職員が辞めずに働き続けられる職場環境を整備する

その先に、利用者と向き合う時間の確保とケアの質の向上を目指す

2　実際に導入した機器の紹介

導入した機器・システム①

骨伝導タイプインカム

職員間の応援要請の迅速化
情報をリアルタイムで一斉共有できる。
連絡のための移動等連絡に係る時間の削減



音声入力ソフト「ハナスト」

支援をしながら、その場でも記録の入力をすることができる。
PCやスマートフォンへの文字入力の負担を軽減し、記録業務の効率化



導入した機器・システム②

見守り機器「aams」

見守り業務の効率化：離れた場所から利用者の心拍・呼吸・体動・睡眠状態などを確認できる

夜間の巡視・訪室の適正化：利用者の状態を確認しながら、必要性に応じた訪室や対応につなげる。

転倒・事故リスクの軽減：離床などの動きを検知して通知し、迅速な対応を支援する。

職員の心理的・身体的負担の軽減：見守りに伴う不安や負担を軽減する

利用者の状態把握と個別ケアの充実：睡眠や離床の履歴を活用し、生活リズムに合わせたケアにつなげる。



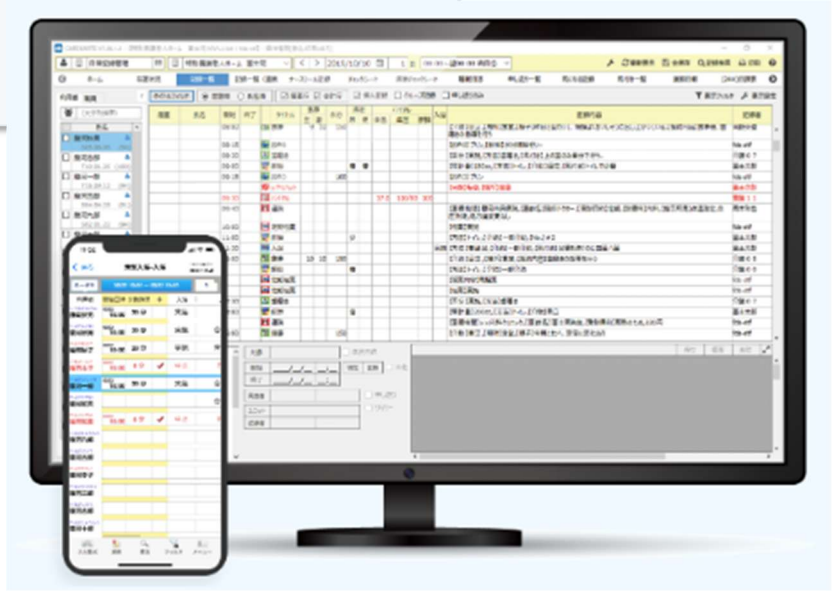


導入した機器・システム③

介護ソフト「ケアカルテ」

「ハナスト、aams」との連携：介護記録・音声入力・見守りシステムを連携させ、業務の効率化と情報共有の迅速化を図る。aamsの検知情報やバイタル情報をケアカルテへ自動記録し、介護記録と同じ画面で時系列に確認できる

CARE KARTE



導入した機器・システム④

天井走行用リフト/HUG

職員の身体的負担の軽減：抱え上げや中腰姿勢での介助を減らし、腰痛予防につなげる。

安全な移乗介助の実現：機器で利用者の身体を支えることで、移乗時の転倒や身体への負担の軽減を図る。

職員の負担に左右されない介助体制の整備：職員の体格や筋力にかかわらず、安全に介助しやすい環境を整える。

利用者の尊厳と安心感の確保：無理な抱え上げを避け、利用者の状態に配慮した移乗介助を行う。おむつ内からトイレでの排泄へ。

ノーリフトケアの推進：人力で抱え上げない介護を実践し、職員が長く働き続けられる職場環境を整備する。





機器を単独で使わず、業務の流れにつなげる

1 aamsで把握

利用者の状態・離床などを確認

→

2 インカムで共有

必要な職員へその場で連絡

→

3 必要なケア

状態に応じて訪室・対応

→

4 音声で記録

ハナストからケアカルテへ

状態を把握 → 情報共有 → ケア → 記録

この流れを踏まえ、ここからは業務ごとに「課題・工夫・変化」を見ていきます。

3　導入後、現場の仕事はどう変わったか

情報共有｜インカム導入後に見えた壁と工夫

導入当初の壁

PHSの使い方に慣れていた

インカムへの切替が進まない

通信環境の整備に時間がかかってしまった。

取り組んだ工夫

・通信テストを繰り返す

・使う場面やルールを整理

・現場の意見を聞いて運用を見直す

現在の位置づけ

・その場で連絡・情報共有

・骨伝導で周囲の音も把握

・PHSからの移行と定着は継続課題

大切なのは「機器を配ること」ではなく「現場で使う意味を共有すること」

記録業務｜その場で記録し、後回しを減らす

導入前

- **ケア終了後に入力**する必要がある
- **端末の場所まで移動**する場面がある
- **記録を後回し**にしやすい

→

導入後

- **音声入力を活用**してその場で記録
- **ケアと記録を連動**させる
- **記録の滞りを減らす**ことを目指す

記録削減時間　22．5分/1日あたり

03｜OPERATION

夜間の見守り｜状態を確認してから訪室する

従来

定期的な巡視が中心

職員の移動負担が大きい

訪室時に睡眠を妨げる場合も

活用後

訪室前に状態を確認

離床・体動・睡眠等を判断材料に

必要なタイミングでケア

期待する変化

夜勤職員の心身の負担軽減

睡眠を必要以上に妨げない

客観情報をケアにつなげる

巡視時間

120分

→

短縮後

30分

90分短縮
（75%減）

移乗介助｜抱え上げない介護を進める

導入前の課題

・移乗に2人介助が必要なケース

・体重の重い方、立位が不安定な方の抱え上げ

・腰・肩・腕への身体的負担

・職員配置が一時的に手薄になる

導入後の変化

・福祉用具を使った安全な移乗

・抱え上げる場面を減らす

・2人介助が必要な場面を一部削減

・他の利用者への対応もしやすくする

利用者の安全と、職員の身体的負担軽減を両立する

4　導入効果を振り返る
～数字で見えた成果と、今後の課題～

04 | RESULTS

4つの取組の効果を、数字で振り返る

22.5分
1日の記録時間短縮
音声記録業務

120 → 30分
夜間巡視時間
90分短縮・75%減

1時間
夜勤帯の休憩確保
見守り機器の導入

2人 → 1人
移乗介助の人数減
移乗用リフトの導入

時間の短縮だけでなく、夜勤職員の負担軽減や利用者の睡眠への配慮にもつながっています。

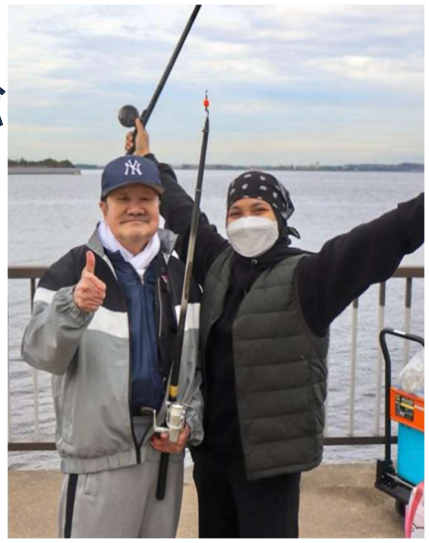
記録時間は1日あたり22.5分短縮。月20勤務日で換算すると、職員1人あたり月450分、年間5,400分になります。

記録時間をは1日あたり22.5分短縮。月20勤務日で換算すると、職員1人あたり月450分、年間5,400分になります。
この5400分を何の時間として使うのか？

取り組み事例（入居者の直接的な支援にあてる（5400分））

①夢かなプロジェクト

入居者の「夢」を叶えるプロジェクト。入居者と家族、職員が共に、「夢を実現するために」計画し、実施する。



事例　クロダイ釣り　野球観戦　お墓参り（他県）
　　星を見に行く　孫の顔を見に行く　　等

できた時間でこのような取組みを行う事で、入居者一人ひとりの思いや希望を理解し、夢の実現に向けて取り組むことで、職員は介護のやりがいや喜びを実感でき、また、入居者や家族と共に取り組むことで信頼関係が深まり、職員同士の連携強化や個別ケアの質の向上につながる。

効果を出し続けるために必要だったこと

1｜導入＝完了ではない

機器を設置しても、使い方が現場に定着するまで時間が必要。

2｜現場の声が必要

実際に使う職員の困りごとや意見を聞き、運用を見直す。

3｜業務そのものを見直す

新たな確認作業を増やさず、本当に必要な手順かを検討する。

現在も残る課題

インカムの定着：PHSからの移行と活用ルールの整理

職員間の習熟度の差：継続的な周知・操作支援

効果の検証：負担や業務時間の変化を確認し、改善を続ける

今後の取組：定着・検証・改善を続ける

- **インカム**：使用場面と情報共有ルールを職員間で整理する
- **ハナスト・ケアカルテ**：音声入力を定着させ、記録の負担を減らす
- **aams**：利用者ごとの状態・リスクに応じて活用する
- **HUG・天井走行用リフト**：対象者の選定と安全な使用方法の共有を続ける
- **全体**：活用状況と業務負担の変化を確認し、改善を繰り返す

テクノロジーを、職員の負担軽減とケアの質向上につなげる

まとめ

大切なのは、機器を導入することではなく、現場で活用し続けられる仕組みを作ること

1. **業務の流れ全体を見直す。**
2. 現場の意見を取り入れながら運用する。
3. 負担軽減とケアの質の向上につなげる

生産性向上の取り組みの最大の狙いと効果

入居者（利用者）の直接的な支援や、個別のケアを行える時間や機会が増え、入居者（利用者）へ質の高い支援を届けるための時間的余裕と気持ちのゆとりが生まれる。

介護の仕事に就く時に多くの職員が思う「誰かの役に立ちたい、入居者の方に喜んでもらいたい」といった想いの実現が可能になり、働きがいのある職場づくりにつなげる事ができる。



ご清聴ありがとうございました。

入浴支援の生産性や介護の質の向上に関する研究開発（AMED採択事業）

2026年 11月 10日

ニチイ学館
GENBA SMILE Lab

ニチイ
日本生命グループ

Ⅰ. GENBA SMILE Labについて

実践的・実用的なテクノロジーを活用し、介護現場が抱える課題を解決し、
未来に向けた持続可能な介護の形を追求していく

GENBA SMILE Lab

GENBA SMILE Lab　概要

2025年4月　活動開始

設立背景

- 超高齢化社会への突入、労働人口減少で**介護業界の需給Gapは今後も一層拡大し、2040年にはおよそ69万人の介護人材不足**が見込まれている
- ICTや介護ロボット開発・活用の裾野は広がりつつあるも、**日々の業務に追われ活用まで至りにくい現状**

目的

- **現場スタッフの負担を軽減し、現場の方が安心してテクノロジーを継続活用できる環境を整え、以下のゴールを目指す**
  - **介護現場の負荷軽減・現場で働く方の満足度向上**
  - **生産性向上・ケア品質向上**
  - **積極的な対外発信を通じた業界課題解決**

検討スキーム

- 課題や市場のニーズからソリューションを検討し現場スタッフとともに検証

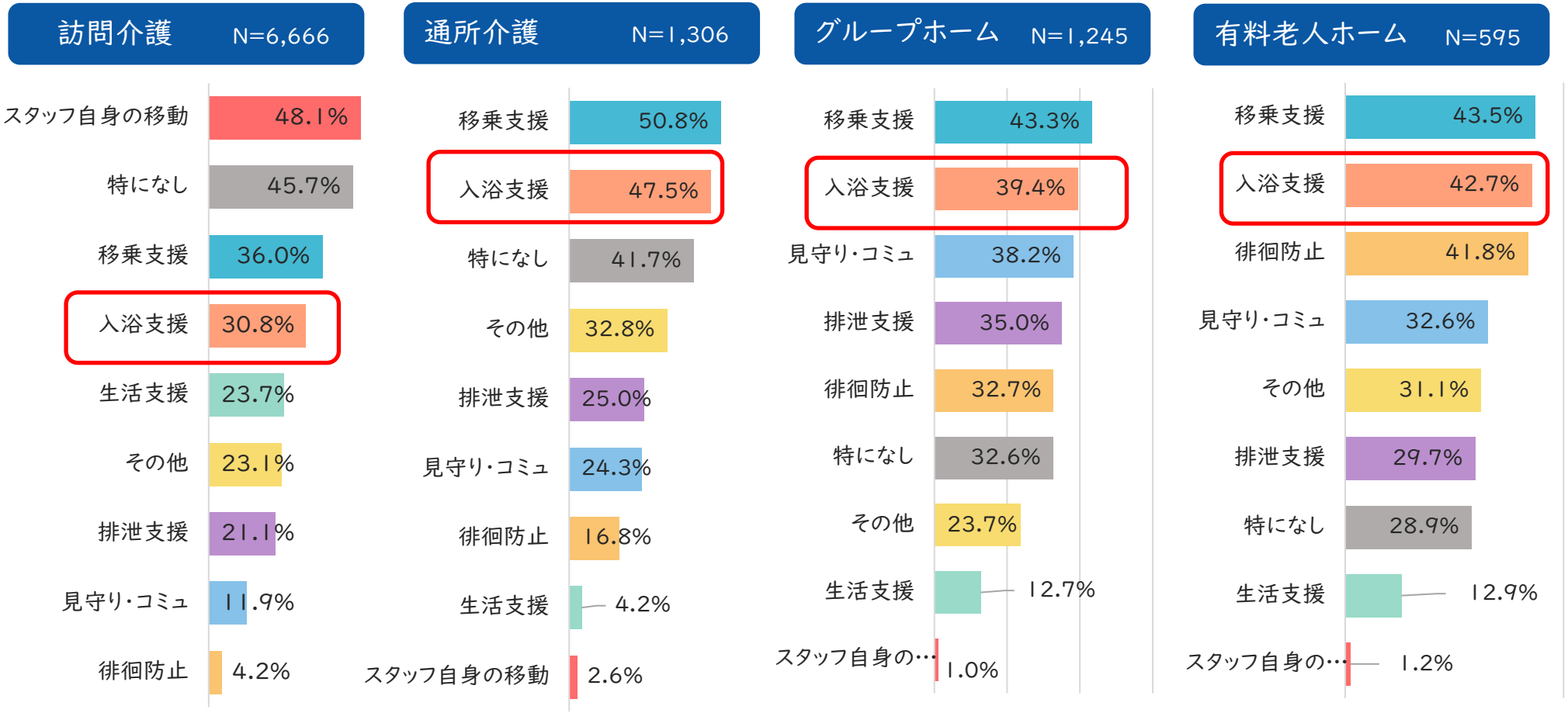


© 2026 NICHIIGAKKAN CO., LTD. All rights reserved.

2. 介護現場の課題　ニチイグループ全社アンケート結果より

質問：介護の仕事の中で、負担が大きいと感じる業務

※下記データは、業務負担1位～3位までの回答をすべて集計したものとなり、ニュースリリースのデータとは傾向は同じですが数値が異なります。



サービスで違いはあるものの、**移乗支援**と**入浴支援**が上位

【入浴支援の具体的な課題の内容】

身体的負担・体力消耗、暑さ、転倒などの事故リスク、設備・環境の課題　等

3. 2025年度AMED採択事業　①研究の実施概要

研究テーマ：入浴支援の生産性や介護の質の向上に関する研究開発
（対象サービス：通所介護・訪問入浴・訪問介護）

背景

通所介護

利用者と職員の双方にとって時間的・身体的な負担が大きく準備・入浴・ケアの各段階で多くの課題がある

- 準備段階では移動負担やバイタル測定
- 入浴中には洗いにくさや負担感
- 入浴後の乾燥や体温調整の問題等

訪問入浴 訪問介護

限られた住環境や限られた人数での対応が求められる中、
短時間かつ安全に支援を提供するための工夫と効率化が求められている

目的

介護現場が抱える以下の入浴関連業務の課題・ニーズを解決する
「**人員配置の効率化**」「**介助時間の削減**」「**教育コストの削減**」
「**皮膚トラブル防止**」「**介護職員の身体的負担軽減**」

実施内容

入浴支援の各フェーズにおけるこれらの課題を総合的に解決し、**介護の質の向上と介護職員の負担軽減を図る**ことを目的として、介護DXパッケージモデルの効果を検証

- 研究体制：（代表機関）アビームコンサルティング株式会社　（共同研究者）ニチイ学館
- 実証の実施期間：2025年11月～2026年2月
- 対象サービス：　通所介護（機械浴・個浴）・訪問入浴・訪問介護
- 実施地域・拠点数：8府県 40拠点
- 参加者：（職員）201名　（利用者）延べ767名

© 2026 NICHIIGAKKAN CO., LTD. All rights reserved.

3. 2025年度AMED採択事業　②研究パッケージの全体像

現状の入浴業務にバイタル計測機器・入浴支援機器・高性能ドライヤー・インカムを導入し、職員と利用者の負担軽減を目指した

ステップ	入浴前（事前準備）	入浴中（入浴支援）	入浴後（片付け）
業務内容	• バイタルチェック • 浴室誘導 • 脱衣介助 • 傷や発疹有無の確認 	• 洗体・洗髪介助 • 入浴中の安全確認 	• 着衣介助 • 整髪整容 • 水分補給の促し • デイルームへの移動介助
想定効果	計測データは**自動でクラウドに転送**（検証時は未実装） 職員はクラウドに管理されたデータを参照し、介護記録を作成することが可能	**洗体・洗髪を浴槽内で実施** **シャンプー・ボディソープ不要**	**素早い整髪を可能にし**、湯冷めを防ぐと同時に、全体的な時間短縮効果を狙う
導入機器	**バイタル計測機器（通所・訪問入浴のみ）** • 非接触で「血管情報」「心拍情報」「温度」を1人当たり最短３秒で一括測定 • 製品：**i-wellebe** 	**入浴支援機器** • こすり洗いせずに洗体・洗髪 • 製品：**ピュアット、ミラバスポータブル** 	**高性能ドライヤー（施設入浴のみ）** • 速乾性能の高いドライヤー 

インカム　（施設入浴のみ）

遠隔でデイルーム・洗い場・脱衣室 間の連携をとる

© 2026 NICHIIGAKKAN CO., LTD. All rights reserved.

4. 2025年度AMED採択事業　③研究結果詳細（一部抜粋）

KPIカテゴリ	当初目標・想定	実績・検証結果
■ **介助時間の削減**	□平均10分以上の短縮	• 職員ヒアリングでは、従来20分から10分で完了した旨の意見を確認。定量分析では、通所入浴の「事前準備時間」が減少。 • 一方、入浴支援・片付けでは有意差なし
■ **皮膚トラブル防止／十分な洗浄**	□こすり洗い・洗浄剤を前提としない洗浄により、皮膚トラブル防止および十分な洗浄につなげることを想定	• 乾燥肌等の皮膚トラブルの改善／拘縮のある利用者で汚れ落ちを実感したとの声が確認された • こすり洗い志向により満足感を得にくい場合あり
■ **介護職員の身体的負担軽減**	□NASA-TLX等での評価。 導入前後で平均スコア10%以上の改善を目標	• 定量分析では、 施設入浴では業務負荷に有意差なしの項目が多い一方、訪問系では機器の運搬・準備・片付けにより負担増加が確認された • 訪問系は利用者宅の住環境や機器搬入出のしやすさが負担に影響
■ **介護の質（利用者満足度）**	□平均0.5点以上の改善を目標	• 定量分析では、 通所、訪問入浴は有意差なし、訪問介護は減少 • 定性結果ではこすり洗いへのこだわりが満足度低下要因となる可能性あり
■ **介護の質（業務満足度）**	□職員満足度調査において、「入浴業務の負担感が軽減された」と回答する職員割合70%以上を目標	• 定量分析では、 通所：有意差なし、訪問入浴：増加、訪問介護：減少 • 定性では「より良い入浴支援サービスを提供できた実感」等の声がある一方、訪問介護では機器持ち運び・準備・片付けの負担が満足度低下要因となった可能性あり
■ **業務時間**	□介助時間短縮により業務効率が向上、職員の生産性が高まることを想定	• 定量分析では、 通所：入浴支援・片付け：有意差なし／事前準備：減少 訪問介護、訪問入浴：増加 • ドライヤーは定量で時短（7.5分→約4分）だが、業務時間全体の短縮としては有意差が確認できない項目あり

© 2026 NICHIIGAKKAN CO., LTD. All rights reserved.

4. 2025年度AMED採択事業　③研究結果サマリ

定量分析の結果、通所の入浴では準備時間の減少が確認された一方で、訪問系では負担増加の傾向がみられた

- 皮膚トラブル・拘縮の方への効果
  乾燥肌等の皮膚トラブル、手指のぬめりやにおいが改善されるなどの効果が確認できた

- こすり洗いへのこだわり
  利用者の中には、入浴とはこすり洗いをするものであるという考えを持っている方も多く、満足感を得られない方もいた

- バイタル計測機器や高性能ドライヤーの効果
  入浴介助の前後で使用した機器は、業務効率化・時間短縮の効果が確認された

- 訪問入浴、訪問介護での負担
  入浴支援機器は、移動時には重く運びづらい、また利用者の住環境のなかで扱いづらく、訪問領域における機器の使用は、職員の負担が大きい点が確認された

- 拠点間の差
  同じサービス種別や都道府県内の中でも、拠点間で利用者満足度や職員の満足度に差があった

© 2026 NICHIIGAKKAN CO., LTD. All rights reserved.

4. 2025年度AMED採択事業　④課題と改善の展望

- 利用者のこすり洗いに対するこだわりを尊重しつつ、これまでの入浴習慣を大切にしながら、機器の使用目的や利点を職員間で共有していくことが重要
- また、職員の負担軽減のためには、持ち運びが不要で使いやすい機器への改良が必要となる

課題	解決方針	具体例
✓ 利用者のこすり洗いへのこだわりが強い	➢ 機器利用が利用者にとって良い入浴体験であることを職員が正しく理解・納得し、利用者に案内する	■ こすり洗いが不要な理由を確認：泡による洗浄で皮脂汚れは落ちること、摩擦刺激は高齢者の皮膚に負担になること、衛生面の検査はクリア済みであること等 ■ 機器を使うことによるメリットの訴求：拘縮のある利用者様等の無理な身体操作が不要となること、肌/髪への美容効果があること、洗身時間が減り身体が冷えにくい等 ■ 利用者の気持ちの尊重：浴槽内でなで洗いする等、利用者に向き合う時間を作る ■ 成功体験の獲得：職員が効果を実感しやすい皮膚疾患がある方、拘縮のある利用者から導入することで効果を実感していただく
✓ 入浴支援機器の持ち運びや準備・片付けの負担が大きい	➢ 機器を「運ばずに済む」もしくは「運んでも負担にならない」利用・設計とする	■ **短期的な対応**：利用者が自費購入、または事業者が購入し利用者に貸与し、持ち運びが不要となるサービスを確立する ■ **中長期的な対応**：機器の軽量化および、コードレス化等、ポータブル性や扱いやすさを向上させる

➢ 入浴業務前後で使用したバイタル計測機器やドライヤーに関しては一定効果が確認できたため、バイタル計測機器で取得したバイタルデータの介護記録システムへの自動連携等が実現されると業務効率のさらなる向上が見込める

© 2026 NICHIIGAKKAN CO., LTD. All rights reserved.

5. 今期の継続取り組み

AMED研究を踏まえ、通所介護サービスにおける入浴支援機器・身体負荷軽減機器を組み合わせた入浴支援パッケージのブラッシュアップを実施中。

背景・課題

- 入浴介助は身体・暑さ・人員負荷が大きい
- 利用者満足度への影響が大きく、品質上重要な業務
- 通所介護の差別化に繋がる可能性あり
- FY25AMED研究で一定の可能性は確認されたが、
  - どの条件で有効か
  - どの組み合わせが良いか
  - どの運用なら定着するか　　の整理が不十分

本実証で確認すること

現場負荷軽減	身体的・暑さの負荷は軽減するか
業務負荷軽減	業務時間・工程負荷は変化するか
定着性	通常運用で継続利用できるか
実装性	業務へ組み込みやすいか
利用者反応	利用者満足へ繋がるか
差別化可能性	利用者獲得の訴求要素となるか

実証対象機器

❶バイタル測定機器

A：i-wellebe



❷入浴支援機器

B:ピュアット/C:ミラバス





❸身体負荷軽減機器

D:ワークベルト/E：冷却ベスト





追加

❹乾髪機器

F:ドライヤー＋スタンド

＋浴室内環境整備





追加

「機器導入」ではなく、「現場で継続運用できる入浴支援モデル構築」を目的として実施中

© 2026 NICHIGARAKAN CO., LTD. All rights reserved.

やさしさを、私たちの強さにしたい。

ニチイ

日本生命グループ

© 2026 NICHIIGAKKAN CO., LTD. All rights reserved.